

ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto
熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2007.冬号] **vol.35**



Museum information

風鎮祭、八朔祭審査 2007.8.18(高森)／2007.9.2(山都町)

高森の風鎮祭、山都の八朔祭には、2004年の生人形展で「つくりもん」コーナーにご出品いただきましたご縁等ありまして、「熊本市現代美術館賞」という賞を設け、毎年、力作を拜見し、そのなかから授賞させていただいております。

◇高森の風鎮祭、今年の出展作は15点。風鎮祭は、桐箱や盆灯籠、茶碗など日常の素材を縄でつなぎ造形するのが特徴です。また、解体後は再利用できるような固定方法をとるのが大前提になっています。今年の大賞は「樽獅子」でした。多様な素材が使用されているのが高得点のポイントです。熊本市現代美術館賞は昭和六組の「山の守り神 白イノシシ」にお贈りしました。プラスチックの食器が多用されるなかで、唯一の磁器の使用。白イノシシの神々しさや重々しさを素材感でも表現されていました。◇山都町八朔祭、今年の出展作は11点。八朔祭は、素材が木の皮や野の植物など、自然の素材を存分につかっているのが特徴。もうひとつの特徴は、時事問題や世相を映し、行政へのメッセージをユーモアたっぷりにこめていること。これは審査の基準にもなっています。今年の大賞は、パイレーツ・オブ・カリビ안의ジャックを造形した、「造り物も欧米か！カリブの海賊 山都に上陸」でした。ジャックの赤いバンダナは、ケイトウの花で表現したそうです。ロングコートも裏と裏で別の植物をつかい、ふわふわとした素材感が生きていました。

熊本市現代美術館賞は、矢部高校制作の、「矢部高 前進 猪武者」としました。受賞理由は、高校1年生制作によるつくりものでしたが、その技術の高さと、八朔祭独特の、木材等植物の材料をつかった荒々しい表現がうまく出されていたことが挙げられます。今年の干支ということで、矢部小学校も猪の作品を出していましたが、小学校のイノシシは、「うりぼう」の可愛らしさが表現されていました。比べてみると高校生らしく大人に近づいた若イノシシのような雰囲気を感じられたのも、好感度アップでした。なかなかマスコミには取り上げられないのですが、八朔祭の造り物審査の場で行われる仮装寸劇は、女装や立ち回り、もちろん「欧米か！」も、ブートキャンプのピリーもあります。矢部高は校歌斉唱でした。(H.T)



「新・あつい壁」記念講演会 2007.8.12

映画「新・あつい壁」の監督、中山節夫さんによるトークを開催しました。映画監督になる前の学生時代から振り返るところからお話ははじまり、まずは「あつい壁」(1970年)についてお話いただきました。そして、特別に「新・あつい壁」のスタイルをスクリーンで見せていただきながら、ストーリーを監督みずからご紹介いただきました。社会に蔓延する無知、偏見、他者の人間性の軽視を原因とした、弱者にもたらされる悲劇について、深く考えさせられる場となりました。講演会参加者には「あつい壁」の事件の起きた舞台となった黒髪小学校に通学されていた方々の姿もあり、当時のお話も聞かせていただきました。(H.T)



モクモク工房作品展示会 2007.8.20-9.9

キッズファクトリーで毎月第2木曜開催中の陶芸ワークショップ(モクモク工房)参加者のみなさんの作品展示会を行いました。1年以上継続して参加している人も多く、みなさんずいぶんと腕が上がっていました。そこで展示会を開催することを目標として4月から8月の間に自由制作を行ってきました。

色、形を統一した一人分の食器セットをつくる人もいれば、家族で使うおそろいのお皿だったり、1つ1つが個性的な作品だったり、人によって変わるいろんな表情が楽しい焼き物たちが出来上がりました。作品にはみなさんのコメントも添えられ、気持ちあふれるなごやかな展示となりました。(A.T)



TSUTAYA AV CLUB presentsシーナ&ロケッツ トーク&コンサート 2007.8.11

「一番大切なのは、心だ！」というポリシーに共感し「ATTITUDE2007 人間の家」に参加していただきました。シーナ&ロケッツのトーク&コンサートを8月11日(土)に開催しました。シーナ&ロケッツのギタリスト・ヴォーカリストである鮎川誠さんの聞き手を務めて下さったのは、鮎川さんと30年来の親交があり、博多の「明太ロック」を支えてきた「ジューク・レコード」オーナーの松本康さん。鮎川さんがロックを始めたいきさつやバンド結成当時のお話、また博多という場所で音楽活動をやる意味について伺いました。なんと！途中からシーナ&ロケッツのヴォーカルで鮎川さんの妻であるシーナさんも飛び入り参加して下さいました。トークの最後に、鮎川さんがおっしゃった「自分達が歌う存在でないといかん」という言葉が胸に響きました。また、「Home of the Beat」(ホーム・オブ・ザ・ビート)を掲げているジューク・レコードさんに、展覧会副題として「The House of Human Beings」(ザ・ハウス・オブ・ヒューマン・ビーイング)を掲げる当館は共感すると、当館館長も念願だった今回のトーク&コンサート実現の喜びを語らせていただきました。博多の先輩を見習って、CAMKも熊本における「Home」として頑張っていきたいと思えます！(ちなみにトーク会場は「ホームギャラリー」でした)ライブはチケット完売！大変な盛り上がりでした！シーナ&ロケッツのメンバーと、オーディエンスのエネルギーが一体となった、歡喜と熱気に満ち溢れたライブとなりました！(A.O)



明後日朝顔プロジェクト2007熊本 杖立ギャラリートーク「種、見知らぬ土地へ」 2007.8.24

杖立の小学校分校校務にて、「明後日朝顔プロジェクト2007熊本」のギャラリートークが行われました。地元のみちくさ案内人による杖立温泉街巡りで朝顔ツアーを行った後、杖立を含む熊本県下3地域の明後日朝顔各代表(杖立朝顔プロジェクトXのリーダー石橋さん・天草のリーダー金澤さん(丸尾焼)・CAMKの橋本)と日比野さんと、朝顔の成長報告と育成を通しての思いなどを語りました。天草代表からは、友情の証に天草生まれの朝顔が一鉢プレゼントされ、引っ越してきた朝顔が杖立の朝顔と並んだ様子からは、朝顔で人や地域が結ばれるプロジェクトの力の強さを感じました。また、HIGO BY HIBINO展の最新作イメージスケッチを披露すると共に、展覧会内容が明らかにされ、最後には、この夏の記憶を詰まらせた種を乗せる船を、来場者が思い思いに紙工作するワークショップも開催。明後日朝顔の行方について、思いを馳せるイベントとなりました。(M.H)



アジア・キュレーター・シンポジウム 2007.8.25-26

近年、アジアの主要都市のほとんどは国際美術展を活発に開催し、その土地の文化の興隆に努めています。このシンポジウムでは韓国、中国、シンガポール、台湾、ベトナムとタイにおいて、活発に活動しているキュレーター達にそれぞれの現場についてお話を伺いました。基調講演のキム・ソンジョン (ソウル、韓国)さんは都合により、来日できなくなり、キムさんの原稿をもとに、韓国の現代美術のピエンナーレについて南島宏館長が報告をしました。なお、キムさんは今年度中にレクチャーを行ってくださる予定で、日程がきまりましたら、HP等でお知らせいたします。

【レポート1】 上海のグ・チェンチン Gu Zhenqingさんは、Zhu Qizhan Art Museumチーフ・キュレーターも務め、現在は中国の現代美術の状況を伝える「Visual Production」(隔月発行、バイリンガル)のチーフ・エディターです。この10年間の上海、北京の現代美術の興隆は、まず国が、現代美術に対して開放的政策をとったことが第一の理由であること、また海外の評価の高まりによってアーティストが、職業として成り立つようになり、アーティストの活動が安定してきたことを報告してくださいました。

【レポート2】 シンガポール・ピエンナーレ総合マネージャーのキー・ホン・ロウ Kee Hong Lowさんは、2006年に初めての国際美術展の開催にあたって、市民に現代美術の展覧会、作品に接点をもってもらうための多彩な戦略についての報告でした。さまざまな宗教、文化が混ざりあう、シンガポールの日常的な場所である宗教施設や繁華街に展示した試み、さらに2008年の第二回への展開についてお話くださいました。

【レポート3】 台北市立美術館チーフ・キュレーターのファン・ウェイ・チャン Fang-Wei CHANGさんは、「台北ピエンナーレ」のこれまでの状況と、「Taipei」と題した展覧会において、出品作家の選定基準や、展覧会のための新しい作品の依頼など、展覧会企画者の在り方について、お話くださいました。

【レポート4】 バンコク在住のグリティシア・ガーウィンウォンGridthiya Gaweewongさんは、タイのNPOでの現代美術プロジェクトの経緯や、ベトナムの「サイゴン・オープンシティ」プロジェクトのディレクターとして、国家による統制の状況などについて報告してくださいました。

両日ともそれぞれ長時間にわたる講演会となりましたが、大変充実した内容のシンポジウムとなりました。なお、この内容については、当館年鑑誌「AG」に全て再録される予定です。お楽しみに！(Y.H)



銀杏祭会場にて「ダンボールで石垣を作ろう！」のワークショップを行いました 2007.10.13

秋晴れの10月13日、「第3回城下町くまもと 銀杏祭」の会場にて日比野克彦展「プレイベント「ダンボールで石垣を作ろう！」」のワークショップを行いました。熊本城築城400年ということもあり、熊本の皆さんと美術館の中にダンボールで大きな石垣を作ってしまうという日比野さんのアイデアから生まれたこのワークショップには、子どもから大人までたくさんの方に参加してもらい、カラフルなたくさんのお石が完成しました。楽しそうにカラーチップを貼る子どもたちの横で、付き添いのお父さんが石工に早変わり…？親子で楽しめるイベントとなりました！作った石は、12月から始まる「日比野克彦 HIGO BY HIBINO」展会場にて巨大な石垣の一部となります。また、この石垣作りは、展覧会が終了する来年の4月まで継続的に行っていきます。作業日程は随時HPにて告知しますので、皆さんぜひぜひ「記後の石工」を目指して美術館に遊びにきてくださいね。(S.K)



開館5周年記念講演会 青柳正規「人間と芸術—その歓喜なるもの」 2007.10.14

国立西洋美術館館長の青柳正規さんによる講演会「人間と芸術—その歓喜なるもの」が、開館5周年記念イベントとして開催されました。当日は展覧会観覧料無料ということもあり、講演会にも大変多くの方にご参加いただきました。青柳館長は古代ローマ美術史の研究をされており、講演会では、現在発掘中のヴェスヴィオ山の北山麓に位置するソマ・ヴェスヴィアーナ市で発見されたローマ時代の遺跡の画像をたくさんお見せいただきました。その時の火山による災害がいかに大規模のもだったか、当時の町の繁栄の様子、水道事情など、古代ローマの人々の生活が目の前に立ち現れるかのような臨場感でもってお話くださいました。また、最近ご本人が気になっている野に咲く草花のおやかについて触れ、充実した幸せな人生とは日常のなかにある美しいものへの関心・好奇心を保ち、そのセンスを磨くところにあるのではないか、との内容の示唆に満ちた言葉でもってお話を終えられました。質問者からの「国立西洋美術館の成立についてお教え下さい」という質問に対して、松方コレクションをめぐる明治期から戦後までのめぐるめく大ドラマについて、これまた臨場感たっぷりにお話され、こちらのほうも大変興味深く、充実した内容の講演会となりました。(H.T)



GIII vol.48 古場田博展 二本木『遊廊』展 —絵巻物・絵画・人形で遊郭を回る (2007.8.1-9.24)

熊本市在住の画家、古場田博による二本木をテーマにした個展を開催しました。かつて日本有数の遊郭街であった二本木、その歴史を描いた全長35mにも及ぶ絵巻、二本木の女性や街路を再現した絵画や人形など多様な芸術表現に加え、当時の様子を写した写真などの資料を展示することで、二本木遊郭の光と影の歴史文化、そこで繰り広げられた生きた人間のドラマを振り返りました。また、本展をご覧になった方々から多くの資料を提供して頂く機会となりました。個展と並行して、和楽のコンサート、二本木と縁のあるゲストを迎えてのトーク・セッション、古場田さんと巡る二本木探訪ツアーなど多彩なイベントを開催し、好評を頂きました。(A.A)



堀浩哉トーク「アーティストという名の闘争者」 2007.9.2

「ATTITUDE2007 人間の家」においてインタビュー映像を上映するという形で参加している堀浩哉さん(多摩美術大学教授)によるトークが行われました。堀さんは多摩美術大学在学中の1969年、美術をはじめとする社会の見直しを掲げた「美共闘(美術家共闘会議)」を結成。当時のエピソードも含めた美術や社会の状況についてや、価値観におけるアートの役割、これからの美術の可能性などについて語っていただきました。また、富山県水見市で行われた「ヒミング・2007」での作品や多摩美生の卒業制作、ユニット00によるパフォーマンスなどの映像も紹介していただきました。(A.T)



CAMK人形劇「3匹のこぶた」 2007.9.9

「ATTITUDE2007—人間の家」記念イベント、人形芝居かすずるによる人形劇公演「3匹のこぶた」が現代美術館アートロフトにて行われました。可愛らしい舞台の上で繰り広げられる、個性豊かな3匹のこぶたたちと狼の追いかけっこに、こどもたちは「あっちに行っちゃったよ!」「こっちにいるよ!」とやんやんやの大声援でした。でも心持ち狼さんの応援の方が多かった気が…?！随所に散りばめられた小さな笑いの種に、お母さんお父さんも、子供たちと一緒に大笑い。楽しい楽しい午後のひと時となりました。(S.Y)



フラメンコ公演「Flamenco at the Museum —アルテ・イ・コラソン〜芸術と心〜」 2007.10.14

この10月、ともに5周年を迎えたSTREET ART—PLEX(<http://www.artplex.jp/>)と熊本市現代美術館。この2つの共催事業として、「ATTITUDE2007—人間の家」最終夜を彩るフラメンコ公演が開催されました。開場と同時に多くの人々が詰め掛け、500人以上がホームギャラリーに集まりました。真剣な眼差しで踊るダンサーは情熱のものといった感じで、手拍子とともに響く「オーレ!」という掛け声も場の雰囲気を一層盛り上げていました。靴音でリズムを打ち出す見せ場では、力強く華麗な足の動きにため息がもれるほど。歌、踊り、ギターといったフラメンコの魅力を充分に楽しめる、臨場感溢れるステージでした。(A.T)



芥正彦リーディングパフォーマンス「ヴァン・ゴッホ、マルドロール、そして言霊の魂へ」 2007.9.30

前衛演劇家であり、東大全共闘の創立者として三島由紀夫との公開討論会を企画参加したことで知られる芥正彦さんのリーディングパフォーマンスが行われました。机の上から転げ落ちるという突然の始まりから、聴衆は芥さんのパワーに一気に吸い込まれました。大声や体全体を使ったリーディングパフォーマンスに緊張と期待の連続でした。芥さんのパートナーであった熊本出身の女優・故中島葵さんにむけてつくられた戯曲やヴァン・ゴッホの自殺をテーマとした評論などを朗読されました。(N.I)



Visitor's Letter 来館者のみなさんからのメッセージアンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

- ◆ 森村泰昌展
 - ・森村さんの作品展を見るために水戸まで出かけたこともあります。今日は偶然めぐりあえて感激しました。(54歳、女性、東京都)
 - ・さいごが少しこわかったけど、おもしろかったです。(8歳、女性、熊本市内)
 - ・絵の登場人物になりきるといふ発想はおもしろかったが、最後の新作はよくわからなかった。(21歳、女性、熊本県)
 - ・美もいろいろだと思った。表面的にはわかりやすかった。(60歳、男性、熊本県)
 - ・僕は中学生だから、小学校のころの思い出が浮かんできました。全部まとめて不思議な世界だと思いました。(14歳、男性、熊本市)
- ◆ ATTITUDE2007展
 - ・ATTITUDE2007、テーマがとてもいいと思いました。しかしとにかく難しかったです。意図や意味が理解したいと思えば、苦しくてくやしかったです。いろんな人にみてもらいたいです。(24歳、女性、熊本県)
 - ・パンフレットの女性を見て、こんなに自信に満ちた姿を写真に残すことが出来てうらやましいと思った。つらい療養所だったろうに。「アティテュード」の意味がわからないのが残念。(50歳、女性、熊本市内)→「態度、ふるまい」という意味です。
 - ・中に入るとすぐ大きな絵があって、最初からスグにスゴイと思いました。せつめいが私には少し難しくよく分かりませんでした。(12歳、女性、熊本市内)
 - ・まず作品に対する尊敬の念が十分に感じられる。その事実には非常に感動しました。作者への心づかいが心地良い。今までのような混沌とした雰囲気の良いとされる場の空気を、見事なまでに打ち壊してくれた。ありがとうございます。(16歳、男性、熊本市内)

【スイットト・クマモト】 本年度のスイットト・クマモトは、熊本の単人インタビューです。(インタビュー構成: 廣庭江美) ※いける=花を生かす、ことと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【未生流編】

山椒の花をお生花に生けてあるのを見て、「いいな」と思って未生流を始めましたとお話を始められた中山稔甫先生。「花材は自然を採求して選ぶこと、つまり足でかせぎなさいと家元に教わりました」という先生が生けるときに気をつけていらっしゃるの、季節感を大切にすること。教える立場となつてからはその伝統の基本を守り、自然をよくみて生けるように心がけているという。「生け終わった花を見ても上達はしません。生けているところを見て上達するものだと思います」といつもここにこざれている先生が激しい表情で家元のエピソードを話されたのが印象的だった。つつい生けてしまう好きなお花は花菖蒲や万年青とのことだが、先生のお顔にはこでまりがびつたりのような気がする。



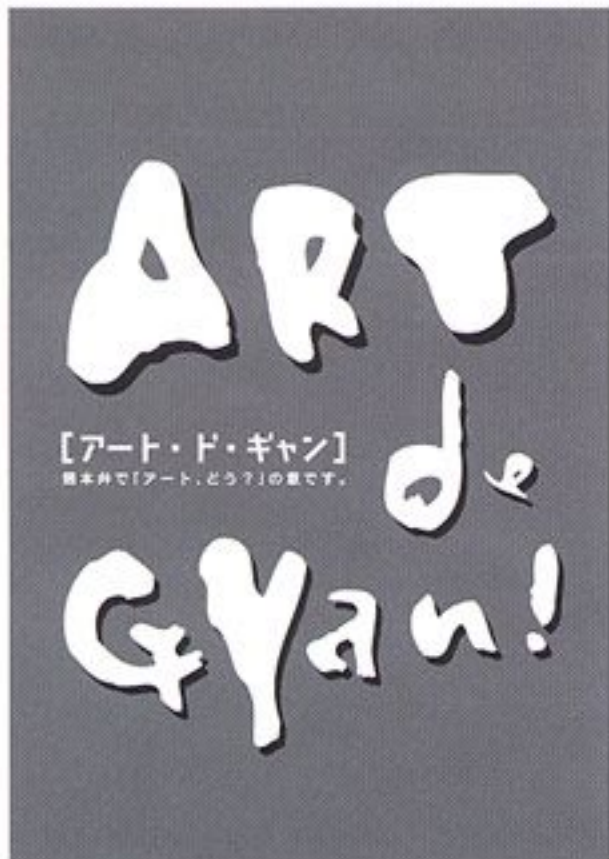
熊本の単人展vol.3作品

【美水流編】

美しく水が流れるように未永く仲良くやっていきたいという願いを込めて新しく立ち上げられた流派名を「美水」としたという水田初興先生に流派の特徴をお聞きしたところ、「かたぐるしくなく、誰でも習ってみたいと思っただけのようなお花をいけたいと思っています」とのこと。いけばなを通して伝えたいことは、「始めたら最後までやり遂げて欲しいと思います。必ず認められる日が来ますから。続けることは難しいですけど、辛抱して続けてほしい」という力強い言葉に、お花は精神修行とおっしゃった意味が伝わってきた。つつい生けてしまう好きなお花はバラとのことだったが、その静かな物腰にはシュウメイギクがびつたりだと思ふ。



熊本の単人展vol.3作品



True & Live展

2007.10.27-11.4 南大手門内2階展示場

熊本市本丸1-1

知的障害者の自立支援活動を続けているNPO法人クローバーアートの主催した2回目の展覧会。クローバーアートは昨年11月にハートウィークに参加したことをきっかけに10名のスタッフとともに結成。デザイナー、建築家、カメラマン、ライターなど幅広い分野の人により構成されている。

展示されている作品はひとつひとつに個性があり、とてもユニークだ。うねる植物のように画面にぎっしりと電車を描いた作品や独自の色彩により植物や動物、昆虫を描いた作品。一人一人の純粋な感性が会場内で輝いているようだった。代表の甲斐さんは障害者の作品が当たり前のように人々の目に触れ、また店にも並んでいるようになって欲しい。そして、心のバリアフリーを目指していると語った。(N.I)



「第7回飛松路易子展 表装への誘い」

2007.10.23-10.28 ギャラリーカフェ トト

熊本市上通町5-46イーストンビル3F TEL352-7162

「絵」や「書」があつて「表装」があると思つてた。しかし、飛松作品の制作はその逆で、「額縁」にあつて「絵」「書」を選ぶという過程を辿る。会場中央に置かれた屏風は、素材である古布の意匠からインスピレーションを得て、万葉集所収の秋の句をあわせている。自分を「異端」という飛松さん、「表装には昔から続く沢山の決め事がありますが、床の間に飾る場が減ってきたこの頃、色んな状況にあわせられるものも作れたらと、遊びながら作らせて頂いている」という言葉が印象的であった。掛け軸約20点、屏風5点に彩られた楽しみに溢れる展覧会であった。(A.O)



「第7回熊本県水墨画協会展」

2007.10.23-10.28 熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本県水墨画協会によるグループ展。全出品数は346点でたいへん見ごたえのある展示空間だった。風景、人物、静物などそれぞれ描き手の思い入れのある画題が取り上げられていた。墨の濃淡で何をどのように表現するかというのが水墨画の面白味だが、天野智法さんの《ルーアフィッシング》は、フロッタージュの技法によって水の動きを表現しているのが新鮮に目に映った。周辺の風景の描写も勢いがあつて面白く感じた。また三宅浄瀧さんの《時空PT2》は、重い雲の下に臨海工場地帯の風景を横長にシルエットで描いているのが洗練された印象を与えていた。顧問の佐藤盛与さんの《登山》は人物の配置も調整で、空の雲の様子と地面の表現がそれぞれ深い表情を持ち、ひときわ眼をひいていた。(H.T)



「第35回 硯心会書作展」

2007.8.22-8.27 アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6 TEL354-2155

熊大書道部卒業生の、年に一回の書作品展である。今回は47名が各一点を出品した。

この会の特徴は、出品者の書風に一定のパターンが見られないことであろう。ほとんどの展覧会は、指導者かリーダーかの書風に似通った作品が結構目に付くものであるが、この書道展にはそれが見られない。つまり、出品者各自が自由な勉強をしているというか、あるいは勝手気ままな勉強というか、いずれにしても一つのパターンに偏ることなく、各自がそれぞれの書風を研究しているということであろう。

参観者のメモにも、例年「各人の変化があつて楽しい」「出品者の顔が見えるのを楽しみにしている」という評価が目立っていた。一方、「独りよがりの楽しさだけで大丈夫か?」という意味の苦言もあつたと聞く。楽しい書道展と同時に、発表する以上は質的な面・レベル面も大切な要素だと、お互いに肝に銘じたい。前顧問の故齋藤鶴跡元熊大教授の遺墨も展示されていた。(T.M)

「熊本城築城400年記念 熊本書芸振興会30年記念・書道展」

2007.9.1-9.14 熊本城・南大手門櫓

熊本市本丸1-1

熊本城築城400年祭実行委員会からの依頼を受けた熊本書芸振興会が、丁度結成30年に当たるので、記念行事として、出品者を熊本書芸振興会役員に絞り、書道展の題材を「熊本城、または熊本に関する詩文」に限定して実施したものである。

出品者は、井田峰月さん、浦川草徑さん、緒方龍生さん、兼城昌山さん、後藤禎哉さん、寿藤草堂さん、田中琴鶴さん、徳永集鶴さん、平田抱山さん、松本蓮郎さん、三嶋天鴻さん、森山淡草、安武美穂さん、吉澤蒼雲さん、吉村伯舟さんの15名で19点を出展。作品は3×8尺の3聯や2聯などの大作が多く、さすが年功の入った選抜メンバーが力作を揃えたという印象で、見応えのある記念展となった。

なお、参観者から「勿体ないので、何点かはずっと飾ってほしい」という声があつたそうであるが、そうもいかなかったようである。(T.M)

「第35回熊本県書道連盟展」

2007.9.11-9.17 熊本県立美術館本館

熊本市二の丸2 TEL352-2111

県下で最大の書道団体である熊本県書道連盟展は、今年は創立50周年を記念する催しである。

新人発掘や若手を育てるという意味で、一般会員から奨励賞42点を選んで表彰するという新しい試みもある。また「書道連盟に功績のあった先達の書」として創立に携わった齊藤鶴跡、坂田暁露、中村龍石各氏らの作品12点も特別展示してあつた。

作品は、漢字・かな・近代詩文書・大字書・篆刻・刻字・墨象の7部門があり、大作も多く多彩である。役員16名、選抜会員55名、一般会員191名、特別展示12点の計324点である。例年に比べて多くの出品となり、会場は意欲と個性にあふれ盛況がみなぎっていた。(S.K)



「第10回 日中友好連合書展」

2007.9.26-9.30 熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

国際文化交流会(鳥飼孝一会長)は2005年11月、中国広東省の佛山市において開催されたアジア芸術祭(中国文化部主催)に参加する機会を与えられて、その折りに佛山市書法家協会役員との「交流書会」を行った。その交流書会における中国側の交換作品を昨年に続いて紹介し、同時に国際文化交流会会員の近作を発表する展覧会である。改めて両国の作品を比較してみると、中国側の作品は、伝統の重みを感じると同時に、日常的というか、極めて自然で、ことさらに気張りの無い当たり前の作品に見える。日本側の作品は、見た瞬間に巧いというか、技巧的に凝っているというか、そんな感じがする。少なくとも、長く眺めて気が安らぐような雰囲気ではないように感じられた。日本では、「賞を競う展覧会」の全盛期であるため、技を競う傾向、賞が取れそうな書風・様式に流れる傾向が見られる。両国の展覧会の性格の違いが大きく影響しているように思われる。(T.M)

「河原町アートの日ポर्टレート」展

2007.10.15-10.30 長崎書店内ギャラリー

熊本市上通町6-23 TEL353-0555

「クリエイターのまちづくり」に賛同した河原町内の店主達で構成された河原町文化開発研究所が毎月開いている「河原町アートの日」。そこに携わる若手のアーティスト12人をピックアップして、作品とともに紹介するこの展覧会では、仏画や、細密画、映像や立体など幅広いジャンルの作家が一同に会していた。多彩な内容にも拘らず会場全体に感じられる穏やかな雰囲気は、全員が河原町というひとつの場所に惹かれ、何らかの形で影響を受けながら創造するアーティストという共通点からくるのであろう。河原町の個性と創造性、若い力を感じることのできる展覧会であった。(S.Y)



「第33回城心会書展」

2007.10.16-10.21 熊本県立美術館分館

熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

江口幹城熊本県書道連盟理事長が主宰する会の79人が120点を出品していた。

熊本城築城400年で城をテーマに漢詩や俳句などをいろんな書体で表現している。

江口幹城会長は6尺全紙2曲に手なれた草書で豪快に見せており、更に「火の國旅情」の一節を中国の高級な「新ろう箋」に調和体で美しくまとめていた。

大石旭水さんは「石光真清手記」の「城下の人より」の一部を調和体で素直に書いている。

永田恵清さんは熊本市政だよりの中から熊本城のことを調和体できとらずに書いていたのがよい。

小林野翠さんは熊本市歌を素朴な線装で4つのブロックに分けてうまくまとめている。全員で「城」という文字をさまざまな書体や書風で書いて大きなパネルに集めた表現は会場を楽しませている。(S.K)

「熊本いけばな芸術展」

2007.10.17-10.22 鶴屋東館7階ホール

熊本市手取本町6-1 TEL356-2111

熊本城築城400年祭秋絵巻協賛・鶴屋創業55周年記念として、第49回熊本県芸術文化祭共催事業の合同いけばな展が鶴屋東館7階ホールで開催。参加20流派、320名の出展者に加えて、今年は学生・子どもの花席も設けられ、ほほえましい作品の数々が並んでいた。また、今年は花材に加工を施した作品が多く見受けられ、出展者の創造性が感じられた。

日中はまだまだ暑さを感じるが、会場内は秋の風情で彩られ、街中にいながらにして秋を満喫できる展覧会となっていた。(E.Z)



「創作人形と小さな灯り展」

2007.10.23-10.28 熊本県伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35 TEL324-4930

光永ひろこさんが指導する教室の作品展。光永さんを含め11人が自由に制作した愛らしい人形たちが、訪れる人々を優しく迎え入れていた。粘土で作られるという人形たちは、着ているドレスや着物も手作り。レースをあしらったものや古布を使ったものなど、小さいながらもとても手が込んでいた。人形たちの顔つきもそれぞれ個性があり、作った人を映し出す鏡のようにいろんな表情を見せていた。「球体関節のバランス、顔を作る時など難しいけれども、人形が好きだから楽しみながら制作を続けていくことができる」と受講者の方が笑顔で語ってくれた。スタンドグラスや肥後まりなども展示され、会場全体が暖かな雰囲気でも包まれていた。(A.T)





アーティストがみずから作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第8回/菊畑茂久馬(きくはた・もくま)さん (from 日本)

1935年長崎県生まれ。「九州派」に参加。1980年代から《天動説》シリーズによって絵画表現を再開。山本作兵衛の模写図を世に知らしめるなどその視野の広さは著書からも窺える。

Q1《天河16》についてお聞かせ下さい。

1991年に、大阪のカサハラ画廊で《海・暖流寒流》シリーズを行った後からお誘いを受け、1996年にいよいよ《天河》シリーズを同ギャラリーで発表しました。のちに円空賞を受賞した1番から7番くらいまで発表しました。この《天河》シリーズは、これまでの段階をよりはっきりと強く打ち切っていくと取り組んでいた作品でした。でも田中幸人さん(初代当館館長)には、「お前はいつもそういうことを言って、またシリーズを進めるんだ」と茶々をいれられたりしていましたが。

熊本に収蔵されている《天河16》は、ちょうど《天河》シリーズにおける最終章、そのエンディングに畳み掛けるように突入するところで、一番盛り上がった感じでした。今見てもその気持ちが作品に現れています。この作品は、制作の2年前くらいから田中幸人さんが、「熊本のオープニングの展覧会で《天河》シリーズをやらないか？」と声をかけてくれていました。「僕は僕のペースで描くからね」とはお話ししていたんですけども…、うまく時が重なり、オープニング展に出品されました。

ふたたび絵画表現に向かいはじめた《天動説》から、どのシリーズもずっと16点までとしてひとつの区切りとしてきました。でも、《天河》のシリーズは17、18と続き、未完成のも5、6点ありますが、いまはそれを早く完成させようとしています。現在は、《天河》シリーズの展開はもう終わりにして、次の新しい仕事に移ろうとしています。50号や100号のタブローで確かめながら行っていますが、僕の場合は、200号までにしないと作品とは言えませんので、いまは確認作業の真っ最中です。あと1年くらいかかるかな。

これまで、《舟歌》までは青で続けてきました。《天河》は赤いのですが、実は、ルーレットシリーズより前の、1962年の《奴隷系図―円鏡による》シリーズ、これが真っ赤なんです。たぶん僕の中に「赤い色」はずっとあったんだろうと思います。絵画表現を再びはじめてから、ずっと青のトーンで畳み掛けてきたのを、はるか1962年から20年くらい経って、そのしよっぱなに出していた音を拾ってきて、通奏低音みたいにずっと静かに響いていたのをボンと前面に持ってきた感じです。ですから、アトリエにやってきた人には、「ようやく菊畑が奔放にやりはじめたな」と言う方もいました。そういう意味で、僕のなかのプリミティブなものが、長い時を経て、じっくりと練られて時が熟して、ボンと出たという感じです。作品発表を控えていた時期に、ずっと作っていたオブジェのなかにもべっとり赤が塗られているものもありましたし、時々出てはいたんですけどね。

Q2 福岡県立美術館で開催されている「菊畑茂久馬と〈物〉語るオブジェ展」についてお聞かせください。

絵画作品の発表をずっと控えていたあいだ、アトリエですと制作を行っていたのが、今回出品されるオブジェ群でした。「表現」を思考・探索する途上で生み出されたもので、発表する気は全くありませんでした。

それが、1988年の北九州市立美術館での個展で、あのオブジェ群が初めてアトリエから世に出されたんです。もう20年も前ですね。しばらくして、1999年に所蔵館の徳島県立近代美術館の常設展示で出品された。作品整理を兼ねてだったんでしょ、その時に良い資料が作られました。そして、約10年ぶりに徳島から運ばれてきて福岡県立美術館で展覧会をすることとなりました。最初は、県美から連絡を受けたときに、すでに美術館に収蔵されているものだし、移動展みたいなもので、僕はあまり関係ないかなーと思っていたんですが、学芸員の方がそれはそれは熱心で、なんだかいろいろ質問されたりして忙しいんです(笑)。

美術館の持っている機能のなかに取り込まれた時点、つまりコレクションとして収蔵された時点から、僕にとっては非常にプライベートなものだったのが、パブリックなものに変貌を遂げつつあるところにあるという感じがします。徳島に収蔵されて、館内で展示されているところまでは、「僕にとって、これは発表するつもりもなかったものだったし、とてもプライベートなものなんです」と言えました。でもオブジェのひとつひとつが研究され、それが、その後のタブローへの繋がりが研究されてきた、そうすると、あのオブジェの持つ意味が変化してきていることを感じるわけです。

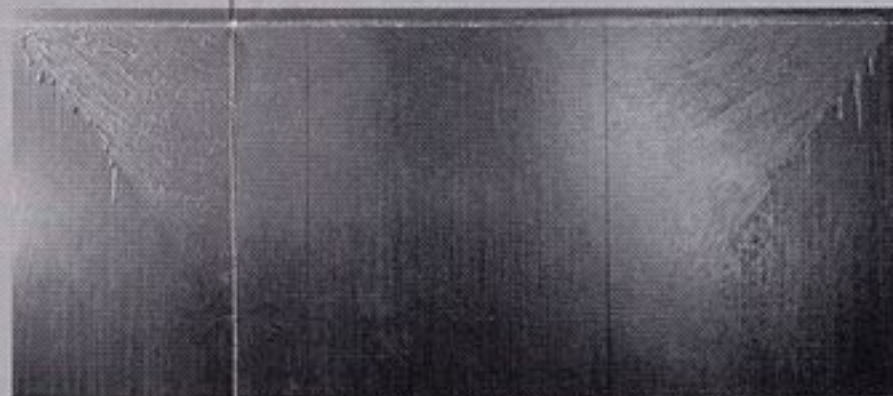
しかも、所蔵館以外で展示されるときには、もうプライベートとは言ってはられない。批評の大地、表現の野っ原にころがされている感じですね。別の美術館で展覧会が行われるごとに、また新しく意味の解釈が加わって、北九州の時と徳島の時と福岡と、それぞれ段階を経てオブジェの作品の解釈が変わっていく。それが福岡ではどういう変化を遂げるのか楽しみだと南郷館長にも言われました。

1999年に出版された徳島県立近代美術館の研究紀要、これは大変よく研究された資料ですが、残念なことに限られた人しか入手できないし、写真が白黒なので色彩の問題がわからなくなっている。ですが、福岡での展覧会カタログでは、かたちと色ははっきりとわかりますので期待ができます。

また、版画の作品《天動説》セットと、《オブジェ・アッサン》シリーズの二つの版画がオブジェの作品と一緒に展示されるのも始めてでしょう。もうすでに版画にしか存在しない作品もあります。オブジェも手を加えたり、壊してしまったものも多く、全部で200点くらい作ったようです。いまからしてみると、崩したり破棄したり、もったいないなという気持ちが自分のなかにもものすごくありますね。前のかたちのほうがよかったのにと思ったりするものもあり、オブジェを見るたびに未練心がわいてきますが、ま、仕方ありません。このオブジェのおかげで前に進めたのですから…。

Q3 読者の方にメッセージをお願いします。

福岡県美の「菊畑茂久馬と〈物〉語るオブジェ展」を見てくださると、《天河16》(当館所蔵)がよくわかっていただけたと思います。



《天河16》2002年、259.1x193.9cmの3枚組 油彩、キャンバス、 熊本市現代美術館蔵

秀岳館高等学校建設工業科作品展

2007.8.28-9.8 SOJOギャラリー

熊本市千葉城町3-35 TEL324-4930

八代市の秀岳館高等学校建設工業科の在校生、卒業生による作品展は、木を素材としたペーパーナイフ、椅子、玩具を中心としていた。いずれも、使いやすいようにと充分に考えられ、丁寧に木にむかった姿勢がうかがえる伸びやかな作品であった。このような制作の経験は、日用品、芸術品など、さまざまなものに接する際に、新たな視点を得ることになったであろう。(Y.H)



ATTITUDE 2007ディレクターズトーク

①「熊本市現代美術館の本質と『ATTITUDE2007』」
2007.7.28

当館館長南郷宏が、「熊本市現代美術館の本質と『ATTITUDE2007』」と題してディレクターズトークを行ないました。開館記念展『ATTITUDE2002』に作品として出品された菊池恵風園の太郎くんとのお会いから始まった全国13ヶ所のハンセン病療養所への作品調査の経緯や、そこで出会った入所者とのふれあいについて、あわせて熊本市現代美術館のありようについて語られました。(E.Z)

②「『はやぶさ』プロジェクト報告会―18時間かけて辿りつくもの」
2007.8.19

2007年5月30日、総勢33名が大きな荷物をかかえて熊本駅へ集合しました。その目的は寝台特急「はやぶさ」号に乗り、18時間もの時間をかけて東京へ向かうこと。「はやぶさ」プロジェクトと名づけられたこの企画は「ATTITUDE2007人間の家」に作品として出品されました。今回は、その一環として報告会を催した。思い出の一枚をプロジェクターで投影しながら、参加者一人一人がその思いを語りました。4日間の旅をともした皆さんはすっかり打ち解けあい、終始笑い声の絶えない会となりました。(N.I)

③「極限の美と人間の可能性～日本・台湾・韓国のハンセン病療養所を訪ねて」
2007.10.12

当館館長南郷宏によるディレクターズトークのラストは、「ATTITUDE2007」展のメインともいえる国内13ヶ所、海外2ヶ所のハンセン病療養所の作品群の解説から始まりました。表現とはなにか、人間の可能性とはなにかという根源的な問いに対して真摯に向かい合っていくことの重要さとその機能をこの現代美術館が担っていることについて語られました。(E.Z)

Letters from CAMKEES

熊本市現代美術館は、約260名のボランティアスタッフ「CAMKEES(キャンキーズ)」によって支えられています。
第4回目はCAMKEES研修旅行についてご報告します！



屋外作品見学中



学芸員さんからのレクチャー

CAMKEESはボランティア同士の交流を深め、その活動をより充実したものにするために、研修旅行を行っています。今回は2007年9月11日(火)、霧島アートの森へ勉強に行ってきましたよ！同じ現代美術館ですが、CAMKが街中にあるのに対して、こちらは霧島山麓の標高約700mにある自然の中の美術館です。午前11時頃現地に到着、当館収蔵作家でもある草間彌生さんの屋外作品や日比野克彦さんの「明後日朝顔」に出迎われました。学びの意欲に溢れたCAMKEES一行、到着後すぐ屋外作品鑑賞へ出発です。しかし、突然の雨により、午後からの屋外見学は中止…その分屋内の「ヤノベケンジ展 トラヤんの世界」を副館長の柳田さんのご案内のもとじっくり鑑賞してきました。

展覧会では、ヤノベさんが霧島町の皆さんと協力して作った新作「亀島」や絵本を見ることができました。また、この展覧会には当館の所蔵作品「アトム・カー」も出品しています。あら！当館での展示エピソードについてCAMKEESの先輩が後輩にお話しています。こうして記憶は継承されていくのですね…また、学芸課長の立元さんより、美術館活動におけるボランティアの重要性について、そして屋外作品をパネルで紹介いただきました。こんなに款待をしていただけるなんて、CAMKEESならではのですね！

2007年10月12日-12月2日まで霧島アートの森では日比野克彦展一日々の旅に出る。一応開催中です。CAMKの展覧会「HIGO BY HIBINO」(2007年12月15日-2008年4月6日)とあわせて日比野ワールド@南九州をお楽しみください！CAMKEESはこの他にも色々な楽しい活動をしています！来春のボランティアへのご応募、おまちしております！(A.O)

中学校の社会体験学習「ナイス・トライ」 2007.9.12-9.13

熊本市現代美術館は、これまで、中学生や高校生による職場体験学習生の受入れを毎年行ってきました。今回、熊本市立京陵中学校が行う社会体験学習「ナイス・トライ」の体験活動場所に熊本市現代美術館を希望した同校2年生5名(立場采奈さん、林田あかねさん、平緒大樹さん、原田皓太さん、中山健さん)が、2日間、美術館で様々な業務にトライしてくれました。

体験学習は、館内の清掃作業から始まり、展示監視員業務、受付案内業務、また事務局での事務作業を手伝い、最後にATTITUDE2007展のレクチャーを学芸員から受けた後、展覧会についての意見発表会を行いました。初めはかなり緊張していた5人でしたが徐々に慣れ、元気な笑い声も聞かれたかと思えます。慣れない仕事にも真剣に頑張ってくれました。

体験学習終了後に、5人に感想をきいてみました。「美術館に来るまでは緊張していたけど、仕事をやり始めるととても面白くて、楽しかった。予想もしてなかった小さな仕事もやっていて、少しびっくりした」(立場さん)、「普段は見られない美術館の裏側の様子やどんな事をしているかが実際に体験できたのでよかったです」(中山さん)、「受付の仕事などをした。何人くらい美術館にきているのかなどがわかってなかなか興味深い経験になった。あと、美術館をじっくり見てまわって、見方を色々かえることもできておもしろかった。」(林田さん)、「美術館でのナイス・トライでは驚くことがとてもあった。美術館の裏を知ることができた。仕事も暇では無く、とてもつらい事もあることが知れてよかった。」(原田さん)、「現代美術館のはじまるきっかけのお話を聞きました。様々ないきさつがあつて設立されたということが初めてわかりました。今あつている美術展は、最初は軽いものだと思っていたが、人の考えなどがこもつていて、重々しいようなかんじがしました。」(平緒さん)美術館に爽やかな風を呼んだ京陵中学校のナイス・トライ！でした。(K.M)



編 5回目の開館記念日を終え、秋もいよいよ深くなってきました。今年は、アートバレーの審査員でもある菊畑茂久馬さんのお話を聞く機会が多くあります。著書がある方にお会いした後、その本を読ませていただくと、文章がその人物の語りとともに耳の奥に聞こえてきたりしませんか？現代美術館の特長のひとつは、同じ時代を生きる作家と、ともに語りあい、その人柄にふれ、その豊かな人間性を、来館者の皆さんにひろくご紹介できることだな、と改めて感じています。

編集長 富澤治子

●執筆者一覧 ●ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
藤原江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本眞子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩美
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
竹田 西
Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

眞原賢一郎
kenichiro Mahara (熊本市現代美術館主事)
橋本眞紀子
Makiko Hashimoto (熊本市現代美術館主事)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.35
2007年12月発行(冬号) ◎無料◎
●発行人/南島 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892